



うつへしゃか「遍歴

一〇代でアラブ世界へ留学、二〇代で結婚・離婚、
三〇代でニュースキャスター、
四〇代で政治の世界へ、そして五〇代で環境大臣就任
いまもつとも注目を集める女性に聞く
クールビズ、東京一〇区、そして五〇代とは――

小池百合子

(こいけ・ゆりこ) 一九五二年兵庫県芦屋市生まれ。七六年力士大學生業。七九年八五年日本テレビ「世相講談」アシスタントキャラクター、八九・九二年テレビ東京「ワールド・ビジネス・サテライト」メインキャスター等。九二年の参議院選挙に初当選以来、国政選挙に六戦六勝。〇三年には環境大臣に就任し、〇四年には内閣府特命担当大臣(沖縄及び北方対策)を兼任。二〇二五年に向けて「ハーブ(TEARB)構想」——ヘルシーのH、エコロジー、エコノミーのE、リッチのR、ピューティフルのBという環境と経済の両立を目指した構想を提唱している。

チャレンジすることが楽しかった

小池 その頃は、ふつうのかわいいお嬢ちゃんでした。誰も言つてくれませんけど(笑)。

木村 お生まれは芦屋で、甲南女子高校を経て関西学院大学に入られた。そこを中退してカイロ大学に行かれたわけですね。それはどうしてですか?

小池 私は会社という組織の中で働くよりも、まず自分の腕に技をつけようと考えました。それで最初は英語を勉強しようと思ったんですけど、英語はこれからは「通常兵器」にすぎない、それならプラスアルファーがなければ戦えないと考え、これから日本にとって必要不可欠な地域はどこかと絞った結果がアラブだったわけです。

私は、そういうことを一七歳で考えたんですね。一〇代では何をし、二〇代では何をするかを。こういう自分の考え方を私は「人生マーケティング」と言っています。

木村 小学校の頃から、将来はこうなると

木村 普通に成人して、結婚するというプランはなかつたんです。

小池 母が、「結婚しても何があるかわからぬから経済力を付けなさい」と言つてしまつた。付きすぎましたけど(笑)。でも一度結婚して、出戻ってます。いろいろチャレンジすることの方が楽しかったんですね。

勝てるという確信がありました



木村 竹村健一さんとやつていらした「世相講談」や「ワールド・ビジネス・サテライト」のキャスターを経て、政治の世界に入られるわけですが、なぜ政治だったんですか。

小池 「ワールド・ビジネス・サテライト」で私がキャスターを務めたのは、ちょうど金融バブルが崩壊していく時期でした。株価・為替といった日々のマーケット情報は、人間の体でいうと、体温や血圧など、体の状態を示すものです。その頃の日本経済は、的確な処置をしなければ手遅れになるという数値で融バブルが崩壊していく時代でした。ニュースを伝えながら、これは政治の責任だと痛感しましたね。しかも、ベルリンの壁が壊れ、ソビエト連邦が崩壊し、湾岸戦争が起り、世界がダイナミックに変わっていく時代でした。日本の動きは一〇周遅れみたいな気がして、これは政治の感度、スピードがあまりにも違いました。ゼロから始めたのは、ちょっと義憤にかられたんです。

木村 当時、細川護熙さんが日本新党を立ち上げた直後で、しがらみのない政党に魅力を感じました。ゼロから始めたのが私の貫した考え方です。今回も選挙の舞台は変えましたが、基本的な中身はなにもえていません。

木村 九月の総選挙では、比例区には重複立候補しないという、退路を断つたかたちでの戦いでした。「いい度胸をしてるなあ」と



思つたんです。「バッヂがなくなるだけ」とおっしゃつまつたけど、そやは言つても、保険をかけておきたいものですよね、人間つ

て。絶対勝てるという自身があつたんですか。

小池 はつきり言つて、馬したように言われますけど、そうではなインです。「郵政法案に反対したのは誰だけ……」と思って、前回の選挙の得票数や得票率が書かれた『国会便覧』を参考に、自分をその選挙区に当てはめてみたら「有権者はどう受け止めるか」が瞬時にわかりました。即決でした。

選挙というものは、有権者の心理で結果が動きます。安全ネットがあれば有権者に訴える迫力がなくなります。迫力をもつて戦うことが運動してくれる人たちにも緊張感を与えるまし、私自身も気合いが入ります。マイナス要素よりもプラスの要素のほうが多いとつたんですね。

それに、たとえバッヂがはずれても、年老いた両親とワン子を食べさせていくことぐらいはできますしね。

大義に共感が加わって動きが出るんです

木村 「環境省」の存在が注目を浴びたり、

うになつたのは、小池大臣の功績大でしよう。

それは小池さんがマスコミの側にいらしたことや、「人生マーケティング」のようなマークットからの発想があるからではないですか？

小池 「クールビズ」には、地球温暖化防止

という大きな目的、大義があります。ただ、大義だけではみんななかなか動かない。大義に共感を加えることによってはじめて動くんです。「クールビズ」の場合は「涼しい」「楽」「かっこいい」ことが共感となりました。くわえて「地球温暖化」の防止にあなたも参加しているというメッセージ性がうまくつながつたんです。大義と共感がマッチすることによって動きが出るんです。

木村 なるほど。経済効果も上がるし、環境省の仕事じゃなくて経済産業省ですね（笑）。予算をどうやって消化しようかと考えるの

が役所の発想ですね。私の場合は、その予算を使って、これを五倍一〇倍にしてやろうと考えます。結果としての経済効果はともかくとして、そこに至るまでにメディアが取りあげれば、効果はひろがります。それらを換算すると、五倍以上はいっていると思います。そこは役所の発想とはまったく違うと思います。

木村 「51」は、五〇代の人たちにエールを送るという雑誌なんですが、大臣からも

「クールビズ」があつという間に知られるよ

うになつたのは、小池大臣の功績大でしよう。それは小池さんがマスコミの側にいらしたこ

とや、「人生マーケティング」のようなマー

ケットからの発想があるからではないですか？

五〇代の人たちは、やりたいことがいっぱいあるはずなんですよ。そろそろ「定年後」を考へる時期でしようけど、リタイアと考へるのではなくて、卒業して、NGO、NPO活動などをやつてほしい。ボランティアは、自分が好きだからこそ力が入るわけですね。いやなことをわざわざしません。人間好きなことをやつているときが一番元気がいい。

国がお金をかけてこれから高齢化社会をどうこうするというよりは、一生懸命地域や社会に奉仕している人たちに税を控除するなどの支援をしてあげたらいと思うんですね。国がなんでもやるんじやなくて、元気でいるれる場所を確保しやすくしてあげることが、国自体が元気になる方法だと思っています。

（後記）

やはり美しい人は得だ。厳めしい大臣室もこの人が座ることによって華やいで見える。「はつきり言つて、勝てると思つてしまつた」。聞きようによつては、やや傲慢にとられがちなセリフも、にっこり微笑みながら言われてみると、「ああそなんだ」と素直に聞けてしまう。とは言え政界はまだまだ男性社会。そんな荒波のなかを、この人ならきっと聰明さと「人生マーケティング」でしなやかに乗り切つていくような気がする。「あら！　ごめんなさいね」って。（木村）

エールを送つていただけませんか。

小池 つねに少年・少女で、希望を自ら見つけて挑戦し続けたいですね。